

第23章 資本主義的蓄積の一般的法則

s

e イギリスの農業プロレタリアート

【P275 後ろから4行目～P279 後ろから3行目】

資本主義的蓄積（資本の蓄積が進めば進むほどそれだけ労働者は貧しくなる）の敵対的性格が野蛮に現れている点では、イギリス農業の進歩とイギリス農業労働者の退歩にまさるものとなないとして、マルクスは、当時のイギリスの労働者の状態を記述しています。

農村労働者の状態は1737年当時と比較して1777年には四分の一まで賃金が引き下げられ、ドクター・リチャード・プライスは「近代の政治は、国民の上層階級に幸いしている。結果は、早晚全王国が紳士と乞食、貴族と奴隷とだけからなる、ということであろう」と『後払いにかんする考察』の中で言っています。

しかし、1770年から1780年までのイギリスの農村労働者の状態は、その食物と住居の状態から見れば良い方であり、1770年から1771年の平均賃金は小麦の量に換算すると90ポイントでしたが、1797年には僅かに65ポイント、1808年には60ポイントにまで引き下げられたと書かれています。

反ジャコバン戦争中（フランス革命により誕生したジャコバン派による恐怖政治に対する戦い）は、名目賃金は高騰しましたが、しかしてその実態は救貧法とその施行実績を見れば明らかであり、救貧法により、「露のようにはかない命をつなぐに必要な賃金が補充されてやっと生活が成り立っているような状態にありました」と書かれており、労働者の置かれている状態を端的に表現しているのが「もの言う道具である労働者は、借地農業者の飼う全ての動物のうちで、もっとも酷使され、もっと粗食させられ、もっとも手荒く取り扱われものとなり^{しま}了った」との表現からも、悲惨な状態に置かれていたことが読み取れます。

【P279 後ろから3行目～P284 6行目まで】

近代的農業は18世紀中頃から始まりますが、1846年の穀物法の廃止を契機に農業革命が進行し、農業の生産力が飛躍的に増大し、借地の集中、耕作面積の拡張、土地に合体された資本の未曾有の蓄積とそれにとמונau地代と利潤の増大が生じましたが、そうした一方で農業労働者人口は年々減少していきました。

【P284 後ろから1行目～P287 12行目まで】

農村労働者人口の減少と同時に労働者の状態は劇的に悪化し、農村労働者の栄養状態は監獄の囚人のそれに劣るほどであったと書かれています。

「イングランドの監獄における罪人の常食と同じ国の救貧院における被救護民および自由な農村労働者のそれと比較してみれば、前者は後の2部類のいずれよりもはるかに良く給養されている」

「イングランドの監獄における常食は、普通の農村労働者のそれよりもはるかに良い」「監獄にいたときはこんなに激しく働かなかったが、食物は十分だった」
etc.

【P290 後ろから13行目～P313まで】

ドクターサイモンは、農村労働者の住居は、ますます悪化し、弊害は急激に増大し、農村民の住宅事情は、極度に悲惨になっているとし、「すべては、適当な家賃を支払うための彼の用意または能力にかかっているのではなく、他の人々が、彼の所有物を勝手に処理する権利をいかに行使しようと思うにかかっている」「一教区における農業人口の定着は、救貧税の追加となることから、大地主は、自分の所有地に労働者の住宅を建てさせないことを定めさえすれば、直ちに貧民に対する彼らの義務の半ばを免れることになる」「労働者は地方に追いやられ毎日6マイルも8マイルも歩かなければならない」「りっぱな農場でも、労働者の小屋は悲惨きわまる種類である物が多く、地主は自分の使う労働者とその家族には、家畜小屋でも結構だと思いながら、しかも彼らの家賃から、できるだけ多くの儲けを出すことを恥としない」「寝室が一つで、炉もなく、便所もなく、開閉できる窓もなく、溝の外には給水設備もなく、庭もない崩れかかった小屋であっても、労働者はこの不法にたいしてどうすることもできない」「ひとたび入ってきた伝染病を阻止しようとする試みはことごとく挫折した」「狭い寝室に男女の大人が、既婚者も未婚者もごちゃごちゃに押し込められ、あらゆる道徳がほとんど必然的に破壊される」と衛生報告の中で述べています。

ドクター・ハンターはイングランド全ての州「1ベッドフォードシャ」「2バークシャ」「3バッキンガムシャ」「4ケンブリッジシャ」「5エセックス」「6ヘリフォードシャ」「7ハンティンドンシャ」「8リンカンシャ」「9ケント」「10ノーサンプトシャ」「11ウィルトシャ」「12ウスターシャ」において農村労働者の小屋を調査しましたが、その実態は悲惨きわまりないものでありました。

このことをマルクスは次のように端的にまとめています。

「都市への不断の移住、農業借地の集積や耕地の牧場化や機械装置の採用等による農村における不断の『人口過剰化』、小屋の破壊による農村人口の不断の放逐、これらのものは並行して進む。一地方の人間が、減少すればするほど、その『相

対的過剰人口』は、ますます大きく、この過剰人口が雇用手段に加える圧力も、居住手段を超過する農村住民の絶対的過剰も、ますます大き、したがって、農村においては、局地的過剰人口と極度に悪疫培養的な人間密集がますます大きくなる。彼らの数の減少にかかわらず、しかも、彼らの生産物量の増大につれて、段階的に進行する農村労働者の『過密化』は、彼らの被救護的貧窮の揺籃（ごく初期の段階）である。きっかけがあると起こる彼らの被救護民的貧窮は、彼らの放逐の一動機であり、彼らの住宅苦の主源泉であって、この住宅苦はまた最後の抵抗力を挫いて、彼らを地主と借地農業者の純粋な奴隷とし、かくて労働賃金の最低限度を、彼らに対する自然法則として固定するのである。」

最後にマルクスは、イングランド東部のギャングシステム＝作業隊（労働隊）制度について触れていますが、作業隊ができた背景は「農村では農業労働者の恒常的な過剰化が生じるが、一方で収穫期などには一時的な労働不足が生じる。作業隊制度はこれに対応するものであって、親方によって指揮・監督され、少年少女で構成されるこの隊は過重労働と道徳的退廃で特徴づけられ、究極的には大借地農業者や地主の利益のために存在していた。」と記述しています。

以上